

「天国と地獄」

日本の歴史や文化の素晴らしさを国内外に広く発信していこうと、年間150回を超える歴史講座を全国各地で精力的に行っている白駒妃登美さんという方がおられます。

彼女の講座には「こんな歴史の先生に出会いたかった」と涙する参加者が続出しているそうです。そんな彼女の著書『感動する日本史－日本人は逆境をどう生きたか』に、東北大震災で被災者の支援をした米軍将校の言葉が紹介されていました。

.....

「支援物資を持って避難所を訪れた私の目にまず飛び込んできたのは、着の身着のまま数日間過した人々の、憔悴^{しょうすい}し切った表情だった。まるで地獄を見るようだった。みんなどれだけお腹を空かせているのだろう？ やっと届いた支援物資を、みんなが我先に奪い合うのだろうか...。ところが、私の予想に反して、被災した人々は、誰も取り乱すことなく、整然と並んだのだ。私はそのことにまず衝撃を受けた。

『何故私たちがこんな目に遭わなければならないの！』と怒りをぶつけられても仕方がないと覚悟していたのに、支援物資を受け取った人々は、誰もが深く頭を下げ、笑みさえ浮かべて、感謝の言葉を口にする。抗えない運命^{あから}に対して、静かに服従する人々の姿に私は深く感動した。

ところが、しばらくして私は「ありがとう」のほかに、避難所の人々が共通の言葉を口にしていることに気がついた。

彼らは何と言っているのだろう？

気になった私は、その言葉の意味を通訳に尋ねた。

『私たちは大丈夫です。でも、この避難所の外には、私たちよりもっと寒くて、もっとお腹を空かせた人たちがたくさんいます。その人たちに先に届けてあげてください。私たちはその後で大丈夫ですから』と、語る通訳の言葉に私の心は震えた。

この地獄のような光景の中に、本当の天国があった」

米軍将校の言葉を紹介した白駒さんは次のように述べています。

私は、この将校の言葉に日本人の果たすべき役割が凝縮されているのではないかと.....そんなふうに思えて仕方がないのです。

『この世は対立する二つのものによって成り立っている』とするのが二元論です。

二元論に従えば「天国と地獄」というのは対立するものです。でも私たちは、もう気がついているのです。天国と地獄という相反するものが存在するのではなく、本当はこの世に生きる私たちの心ばえ一つで、この世が天国にもなるし地獄になるということを.....

みんなが自分の事しか考えていない状況は、この世を地獄に変えます。たとえ物質的に豊かでも、そこに生きる人々の心が貧しければ、この世は地獄です。反対に、私たちが互いを思いやり、ゆずりあい、与え合って生きれば、この世は天国になります。

「こう生きれば、この世が天国になるよ」という天国のモデルケースを体現すること、そしてそれを日本から世界に発信することが私たちの役割ではないか。

先人たちが大切に育んできた、日本人らしい素敵な生き方の中に、私たちが幸せに生きるためのヒントが溢れている。

.....

「天国」という言葉にはいささか異論がありますが、ここでは仏教で言う「極楽浄土」の事として話を続けます。

白駒さんは天国と地獄は相反するものとして存在しているのではなく、私たちの心ばえ一つで、この世は天国にも地獄にもなると仰っていますが、これは「縁起即実相」、「二即一」(二つであって一つ)、「一即二」(一つであって二つ)と観る仏教の物の見方、考え方に大変近いものがあります。

以前こんな話を聞いたことがあります。

ある信者がお釈迦さまに「地獄と極楽はどこが違うのでしょうか」と尋ねるのです。するとお釈迦さまは「それならば今から地獄、極楽で食事が始まるから、その食事風景をみればよく分かるぞ」

そう仰ると、まず地獄の食事風景を見せるのです。

そこでは痩せ細った亡者が1メートルもあろうかという箸を使って、必死の形相で食べ物を口に運ぼうとします。しかし箸が長いためどうしても口まで届きません。

いらだつ亡者は、周りの人の食べ物にまで手を出しますが、勿論、食べることは出来ません。

そのうち、亡者同士の罵り合いが始まり、またたく間に食堂は怒号の渦巻く争いの場と化していました。

続いてお釈迦さまはその信者に極楽の食事風景を見せるのです。

極楽の食堂は地獄の食堂同様、食事の内容も長いお箸も変わらないのです。ところが極楽の人々はガリガリに痩せ細った地獄の亡者と違って丸々と太っているのです。

その食事風景はというと、お互いに長い箸で食べ物をつまんで、「どうぞ、どうぞ」と向かい合っている人に食べさせているのです。極楽の食堂はまことに和やかな空気に包まれていました。

食事風景を見終えた信者は、地獄極楽の違いをはっきりと知ることが出来ました。

そうです！

「自分さえよければ...」という自分の事しか考えないその心の貧しさが地獄を作り出していたのです。

一方、いつも相手の事を思いやり、相手の喜びを私の喜びとしていく、そんな心の豊かさを持った人々の住む世界が極楽だったのです。

だから同じ長い箸を使っても、それが争いのタネなることもあれば、逆に喜びのタネになることもあるのです。

地獄極楽は表裏一体の世界なのです。二つであって一つ、一つであって二つ。白駒さんの仰るこの世は天国にも地獄にもなるというのはこのことなのです。

そうして白駒さんは、被災者の素晴らしい生き方（他を思いやり、慎ましく、礼節を失わず、感謝を忘れない）を見て、それはすでに私たちの先人が大切に育^{はぐく}んできた生き方であり、その生き方を世界に発信していくことが私たち日本人の果たすべき役割だと仰っています。

これは、まさに仏教の説く縁起の道理に基づいた生き方に相通じるものがあります。お釈迦さまは、この世界はあらゆるものが縁^よりあい支えあって（縁起）成り立っている、だからその道理に従って生きなさいと仰いました。

その道理に従って生きていく時、私たちは自分一人で生きているのではない、多くのおかげをいただいて、生かされて生きているという事実に目覚めます。その事実に目覚める時、「あなたの幸せは私の幸せです。あなたの悲しみは私の悲しみです」という他を思いやる同悲同苦の心が生まれるのです。そうしてそのような心を持った人を仏教では菩薩と呼びます。

仏教は、私たちの生きてゆく世界が、そのような人々（菩薩）の住む世界になることを教えの目的にしているのです。

こうして白駒さんの著書を通して、私たち日本人の生き方の素晴らしさを見てまいりましたが、この見事な生き方の背景には、仏教の教えが色濃く反映されていることを、つくづく感じさせられました。

平成29年7月 「光明寺だより95号」より